



透明なのに
表情がある。
小川のせせらぎ
のような、
揺らぎを感じる
ガラス器

飛騨高山
安土草多さん



ガラスのやわらかなうねりが、太陽の光を浴びて幻想的な世界をつくりだす。安土草多さんのガラスの器たちは、飛騨高山の凛とした空気を吸い込んでいるためか、とても澄んだ温かな風合いを持っている。

安土さんの工房は、高山市街から車で約15分の小高い丘にある。樹木が立ち並

び、野の花が咲き誇る。目をあげると、遠くにアルプスの山々が一望できる。

「この辺りは、祖父が開拓したんです。今は、叔父さんの地ビール工房、父と弟のガラス工房、そしてそれぞれの家が建っています。つい最近までは、祖父のりんご畑などもあったんですよ」と安土さん。そもそも安土さんの父忠久さんが

ガラスを始めたのは、安土さんの祖父と親交のあった、倉敷の名工、小谷真三さんが、夏の暑い時期だけ、この地で作品づくりを行っていたことから。忠久さんが見様見真似でガラスを吹いたのが原点だという。

「小谷さんは、今まで何人かで作業してきたガラスの工房を、一人ででもでき



るように窯を改良したんです。いわば、ガラス作家の第一人者。自分の窯をつくる時、参考にさせて頂きました。つくりがアナログなので、全部自分でメンテナンスができるし、なんといっても一番の魅力は、味のあるものができる。形って、作業環境から生まれると思うんです」。

理系大学に在籍していた安土さんは、当初ガラスをするつもりは全くなかったという。しかし、大学2年の時、ふと迷う。自分には、人と一緒に仕事を成し遂げるより、一人で汗を流してものをつくる方が向いているのではないかと。父のもとで半年間修業し、父と同様、見様見真似で一人でガラスと向き合うことになった。安土さんが窯づくりと格闘する日々は、5〜6年に及んだ。2〜3ヵ月考え

て改良し、失敗した中で学んでいくという手探りの状態。「でも、それが楽しかったんです」。

*

安土さんの作品は、80〜90種ある。そのうち、照明が約10種、グラスだけでも約20種。「それぞれサイズのバリエーションもつくっていますよ。グラスは、手の大きさによって持ちやすさが変わりますから。みなさんに手にとってもらって、その人に合うものが見つければいいなと」。

サイズだけではない。持った時に、手がすべらないよう凹凸をつけたり、口あたりをよくしたり、使い手のことを思いやる心がグラスに現れている。



sota azuchi
1979年、岐阜県高山市生まれ。2001年、父・安土忠久の下で宙吹きガラスを学ぶ。2010年、日本民藝館展において大鉢、大皿、八角グラスなどが入選。個展・グループ展などを中心に活躍中。

「食卓にガラスの器が入ってほしい。でも、陶磁器に比べると、ガラスは表面がツルンとしていて表情のレパートリーが少ないんです。だから、ガラスにも表情が二つぐらい入るよう心掛けています」。

ガラスを吹いてから下の部分だけを水につけ、温度差を利用して表面を縮ませ、わざとびびをつくる。鉄の作家にオーダーした型に、ガラスを入れてから吹いてみたり。そうすることで、型吹きも違ったニュアンスがうまれる。特に、八角グラスや小鉢など。八角といっても角張ってなく、丸みを帯びた八角がいい表情を醸し出している。テーブルに並べると、陶磁器にはない、水の揺らぎのような、安らぎをもたらしてくれそうだ。

十三夜ウェブマガジンより転載